

日本語教育における位相の問題

——日本語教育と関西方言とのかかわりを中心に——

佐 治 圭 三

要 旨

現代日本語の位相の問題のうち、日本語教育では、敬語、専門用語、男女のことばの問題などは、従来とりあげられてきているが、今まであまり問題にされてこなかった方言の問題が、多くの外国人が日本各地で日本語を学習するようになってきている現在、避けて通れないものになっている。

この問題を考えるための資料として、関西地区にある13の日本語教育機関の日本語の先生および外国人の日本語学習者に対し、アンケート調査を実施した。

その結果、日本語学習者の大部分が自分の生活している地域のことば——この場合には関西方言——を習いたいという気持を持っていること、日本語の先生もかなり多くの人が教えるべきだという意見を持っていることがわかった。

日本の各地で日本語を学習している外国人が、生活に困らないように、トラブルが起らないように、土地の人と話し合えるように、土地のことばは、聞いて分かる程度には、適当な時期に教えるべきであり、そのために、それぞれの地域で教えるべき内容を準備する必要があるものと考えられる。

はじめに

近年、日本と諸外国との交流が盛んになるにつれて、外国人の日本語学習者の数も急激に増加してきており、質的にも多様化してきていることは、新聞、テレビなどでもたびたび報じられ、すでに周知のこととなっている。昭和六十三年三月に出された、文化庁文化教育部国語課の報告書、『昭和六十二年国内の日本語教育機関実態調査の概要報告』によれば、国内での日本語学習者数は、昭和六十二年十一月一日現在で、43,386人で、これは10年前の昭和五十二年度の14,179人の三倍強に当たっている。

このような日本語学習者の数の増大は、同時に、学習者の母国、年齢、目的などの多様化を伴っているであろうし、また学習の形態や、学習者の日本における生活、活動なども多様化してきていることを示していると思われる。ということは、国内の日本語学習者が、日本語のいろいろな面一位相と、より広く、より直接的なかかわりを持つようになってきているということでもある。

今から20年ほど前の、筆者が日本語教育に携りはじめたころは、日本語教育と言えば、大学の留学生のためとか、大学を受験する外国人のためとか、海外からの技術研修生のためとか、日本で仕事をしている外国人の子女のためとか、ごく限られたものでしかなく、

日本語教育と現代日本語の位相とのかかわりは、敬語や専門用語の問題のほかには、それほど問題にされることもなかったのであるが、現在のように多数の外国人が日本に来て、日本で生活をしながら、また、日本人の間でいろいろな仕事や活動をしながらか日本語を学習するというになると、日本語教育における位相の問題は、日本語教育に携わる者にとってもより直接的な問題になってきたと言わねばならない。

現代日本語の位相の問題のうち、敬語の問題は、外国人にとっては日本語学習の中で最も困難なものの一つであるので、十分に教えきれるとは言えないにしても、日本語教育の内容の一つとして、どの教育機関、どの教科書においてもとりあげられてきていると言つてよからう。ただ、広く、待遇表現という面から見れば、初級の段階では一般に「です・ます」体での教育がなされ、普通体はあまり教えられないとか、軽卑語は中・上級の段階でも問題にされないとかいう面があり、学習者がテレビを見ていても分からないところがかかり出てくるといったこともある。

男女ことばの問題は、戦後その差が小さくなったこともあって、日本語教育ではあまり深くは扱われないのが普通であろうが、文末表現の相違などのあらまはは教えられているものと思う。

話しことばに対する書きことばの問題は、たいていは中級以後の段階で、読解の授業や作文・文章表現の時間などで扱われてきている。

専門用語の問題については、外国人のためのその分野の研究や辞典なども十分あるとは言えないが、必要な場合には、いろいろな段階で、ある程度扱われてきていると思われる。最近ではビジネスのための日本語クラスを持つ学校もあり、そのための教科書——たとえば『BUSINESS JAPANESE a guide to improved communication』 Nissan Motor Co., Ltd, Bonjin Co., Ltd, 1984 など——も出版されている。

特殊な職業や集団のことばや陰語などに関しては、広く知られていて普通にも使われるもの以外は、一般の日本語教育としては扱う必要はないであろう。

以上に触れたものは、日本語教育においても、以前から必要に応じて扱われてきたものであるが——そして、そのおのおのについてさらに深い検討や研究が必要ではあるが——現代日本語の位相の問題のうち、従来ほとんど問題にされてこなかったもので、現在、避けて通れなくなったものに、地域のことば——方言——の問題がある。

少し前までは、国内の日本語学習者は、主として首都圏に集っていて、それ以外の地域には、大学の留学生や受験生や技術研修生ぐらいいかないで、それもたいていは外国人寮に入っているといった状況で、日本語教育では方言の問題をとりあげる必要もあまりなかったのであるが、現在は北海道から沖縄まで、全国の各地で日本語教育が盛んに行われていることが、前記の報告書からうかがわれるし、その数もかなりなものになると思われる。たとえば、筆者の住んでいる近畿圏の、大阪、京都、兵庫、奈良にある日本語教育機関は、前記の報告書によって数えたところでは、87機関あり、これは全国の機関数496の17.5%に当り、そこで日本語を学んでいる学習者数は、7,777人で全国の学習者43,368人の17.9%に当たっている。

(16) 日本語教育における位相の問題

今回、筆者は、日本語教育と地域語（この場合は関西方言）とのかかわりを考える資料とするために、大阪、京都、兵庫、奈良にある日本語教育機関のうち13の機関^注の関係者にお願いして、先生方および外国人学習者に対するアンケート調査を実施した。なお、大阪大学文学部日本学科に在籍する留学生の一部、大学院生、研究生にも依頼して、友人の外国人からのアンケートを集めてもらい、大阪外国語大学、神戸大学、奈良教育大学、甲南女子大学などの大学院に在籍する留学生にも同様の依頼をしてアンケートを集めてもらった。以下、いただいた回答を分析することによって、この問題を考えていきたい。

なお、地域の生活語と日本語教育とのかかわりについては、伴紀子氏の『「生活語」の教育上の配慮』（『日本語教育 56号』1985-7）があり、参考にさせていただいた。また、大阪市立大学の中国からの留学生、彭飛氏の『大阪ことばと中国語』が出版されて、大きな反響を呼んでおり、大阪大学大学院生の S.D.Long 君は筆者の担当した昨年度の講義のレポートとして「外国人留学生の関西方言理解能力」と題するものを提出してきた。このように、留学生自身が身のまわりの生活語——方言——に関心を持ち、研究しているということをも、日本語教育関係者として、日本語教育の中で方言をどう扱うべきか、結論を出さねばならないと感じさせられるのである。

1

まず、日本語の先生に対するアンケートから見てみよう。アンケートに答えをよせてくださった先生の内分けは次のようである。

第1表

性別	男	20人	24.3%	86人
	女	59人	68.6%	
	不明	7人	8.1%	
出身地	東京地区	15人	17.4%	
	関西地区	48人	55.8%	
	その他の地区	17人	19.8%	
	不明	6人	7.0%	
日本語教育 経験年数	1年未満	9人	10.5%	
	1年～2年	16人	18.6%	
	3年～5年	21人	24.4%	
	6年～10年	18人	20.9%	
	11年以上	12人	14.0%	
	不明	10人	11.6%	

さて、第一の質問

首都圏以外の地方、地域で生活する留学生（などの外国人）に、その土地の生活語（方言）を教えておいたほうが良いと思われませんか、その理由は？
に対する回答を表にして示せば次のようになる。

第2表

教えておいたほうが良い.	41人 (47.7%)
条件付きで、教えたほうが良い.	17人 (19.8%)
(時間的余裕があれば)	4人
(質問や要望があれば)	6人
(中級あるいは上級の段階では)	7人
教える必要はない.	28人 (32.6%)
計	86人

「教えておいたほうが良い」という意見の人は41人(47.7%)であるが、その理由としてあげられているものをまとめれば、以下ようになる。なお、このように分けた時に、一人の意見が二個以上にわたる場合、それぞれ一人として数えたので、合計の数は、表にあるものより多くなっている。

- (1) 日常生活を円滑に送れるように (16人)
- (2) 土地の人とのコミュニケーションをはかるため (15人)
- (3) 地域社会をより深く理解できるように (7人)
- (4) 誤解やトラブルを防ぐため (5人)
- (5) 習っていることばが身のまわりで聞く日本語とあまり違くと、勉強意欲を失い不信感を持つ場合もあるのでそれを防ぐため (3人)
- (6) 生活している地域のことばは理解できる必要がある (2人)
- (7) 覚えた方言を標準語と区別するため (1人)
- (8) 言語教育において、教えないほうが良いと思うものはほとんどない (1人)

上記の(3)の中には「その地域の人とコミュニケーションできなければ、留学の意味が半減する」という意見や「土地の人は外国人だからといって標準語で話してくれはしないから」というのもあった。

条件付きで「教えたほうが良い」という人は17人(19.8%)であるが、その中には外のコメントを書いた人はなかった。なお、条件付きをも含めると、「教えたほうが良い」という意見の人は58人(67.4%)になる。

「教える必要はない」という意見の人は、28人(32.6%)であるが、その理由としてあげられているものをまとめれば、

- (1) 教えなくても地域の人と接していく中で自然におぼえてくるから (9人)
- (2) 標準語の丁寧語を使ったほうが無難だから (3人)
- (3) 方言は微妙なアクセント、抑揚、ニュアンスを伴うので、使う場合にはマスターしていないとかえって誤解が起こることもあるから (2人)
- (4) 教えなくても生活に困らないから (2人)
- (5) 教えておくべきことが多く、時間的余裕がないから (2人)
- (6) 方言が自由に使えても本国に帰ってから使う日本語に利点がないから (1人)

(18) 日本語教育における位相の問題

(7) 標準語さえ知っていれば良い (1人)

(8) 外国語学習で方言まで習うことは少い (1人)

のようになり、「教える必要はない」とする人の中にもいろいろな程度、いろいろなニュアンスがあることがわかる。

次に第二の質問

教えておいたほうが良いと思われる方は、どの程度教えておくべきだと思われますか。に対する回答は、

(1) 聞いて分かる力(理解能力)をつけさせる程度に (16人)

(2) 生活上困らない程度に (13人)

(3) その地域でよく使われる語彙のうち標準語と異なるものが分かる程度に (9人)

(4) その土地のことばのうち、次のものを教える程度に

(i) 慣用的な表現 (4人)

(ii) 標準語から変化する場合の規則 (2人)

(iii) 発音の標準語との大まかな違い (1人)

(5) 質問があれば答える程度に (4人)

(6) わざわざ時間をかけないで教えられる程度に (2人)

(7) 共通語とバイリンガルぐらいまで (1人)

(8) 知識として主な言い方を知っている程度に (1人)

(9) 参考書を示す程度に (1人)

のようになり、ここでも非常に積極的なものから消極的なものまでであるが、大勢は「生活に困らないように、聞いて分かる程度に」というところにあるようである。

第三の質問

あなたの地方で暮す外国人にこれだけは教えておいたほうが良いと思われる地域の生活語(方言)があれば書いてください。

については、問いがしっかりしていなかったために、たとえば「敬語」、「否定の表現」、「～テイルの言い方」といった形での回答や、「サムナッタ」「ゴッツウ」といった具体的な表現での回答など、いろいろあったが、それらをまとめてみると、おおよそ以下のようになる。

アクセントの違い

あいさつ語(オオキニなど)

応答語(ソウヤ)

敬語(～シヤル、～ハル)

指定の表現(～ヤ)

否定の表現(～ン、～ヘン、～ヒン)

禁止の表現(～タラアカン、イカン)

推量の表現(～ヤロ、～ジャロ)

勧誘の表現(～シ)

断りの表現 (ドンナコトデ、セツカクデスケド、マタキテクダサイ、考エトキマス)

理由の表現 (～サカイニ)

相手に対するエチケットに関する言い方

形容詞連用形のウ音便形およびその脱落形 (ハヨウ、ハヨ、サムナツタ)

五段活用動詞が～テ～タに連なる時にウ音便になるもの (コウタ、ユウタ)

「～ている」「～ておる」「～ておく」の言い方 (～シテンノ、～シトウ、モウトキ)

「～のだ」の言い方 (～シテン、スルネン)

ナンボ (いくら)、ホンマ (本当)、ヒチ (七)、ナオス (片付ける)、ナンデ (なぜ)、ホンデ (それで)、ゴツツウ (大変)、ギョウサン、ヨウサン (たくさん)

ここにあげてきたものは、おおよそ、知っていないと関西地域での生活や土地の人たちとのコミュニケーションに支障をきたすものリストになっていると言ってよからう。

その次には、しぐさ (ジェスチャー) に関する質問を入れたのであるが今回はとりあげない。

最後の質問

教室の授業についてどうあるべきか、次の中から選んでください。

- a・ アクセント、語彙、文法のすべてにわたって標準語で行うべきである。
- b・ 語彙や文法は標準語であるべきだが、アクセントは地域共通語的なものでよい。
- c・ その他

対しての回答は、次表のようにになっている。

第3表

	a	b	c	不明	計
ただし書きのない人	38	20	0	3	86
ただし書きのある人	9	3	13	0	
計 (%)	47(54.7)	23(26.7)	13(15.1)	3(3.5)	

すべて標準語でという a の回答は 54.7% で過半数を占めるが、そのうち、ただし書きのあるものは、

- (1) 地域の生活語を紹介する時間を別に設ける (3人)
- (2) 地域共通語の知識があれば併せて教えたらい (1人)
- (3) 地域語についての教師の知識は必要 (1人)
- (4) はばのある日本語が話されていることを念頭において柔軟に (1人)
- (5) あまりアクセントに神経質になりすぎるのはいけない (1人)
- (6) 一応は a (1人)
- (7) 考え方としては a でも、実際にどこまで徹底できるかは別問題 (1人)

のようで、地域の生活語を別に教えるべきだという意見と、標準語を教えるといってもあまり固く考えないほうがよいという意見とが見られる。

(20) 日本語教育における位相の問題

第4表

母国 関西に来てからの期間 男女	中国			台湾			香港		韓国			タイ		マレーシア	
	M	F	不明	M	F	不明	M	F	M	F	不明	M	F	M	F
I 0～0.5年	25	10	2	4	14		1	2	6	22		3	1	1	1
II 0.5～1年	19	13	1	17	22		1	3	8	9		2	1	1	1
III 1～1.5年	8	8		6	25	1		1	5	1		6	3	5	1
IV 1.5～2年	2	7		2	9		3	2	2	1	1			1	
V 2～4年	9	7		11	3	1	3		6	6			1		
VI 4年以上				2					4	2		1			
計 7	63	45	3	40	75	2	8	8	41	41	1	12	6	8	3
		111			117			16		83			18		12

母国 関西に来てからの期間 男女	ドイツ	イギリス	オランダ	カナダ	ブラジル	アルゼンチン	ケニヤ	不明		
	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
I 0～0.5年	1		1							
II 0.5～1年				1			1			1
III 1～1.5年			2			1	2	1	1	1
IV 1.5～2年										
V 2～4年										
VI 4年以上										
計	1		1	2	1	1	2	1	3	1
						3		3		

インドネシア	フィリピン	インド	シンガポール	パプアニューギニア	ビルマ	U.S.A.	フランス
M F	M F 不明	M F	M F	不明	M F	M F	M F
	1 3		1	2			2
2	1 9	3	1		1	5 1	1 1
4 1	2	1				1 1	1
1	3 1	1					1
					1		
						1	
4 4 8	2 17 1 20	4 1 5	1 1 2	2	1 1 2	6 3 9	3 3 6

計
113
126
89
37
48
10
423人

男 200/女 214/不明 9/計 423人

(22) 日本語教育における位相の問題

回答がbであったのは26.7%で、全体の1/3弱であるが、そのうちただし書きのあるのは3人で、

- (1) 学生の中で、帰国した際、地方弁で日本語を教えることになるので、標準語でしっかり教えてほしいと望む学生たちも結構多い(1人)
 - (2) 中、上級の場合はb。初級の間は標準語で行なった方がよいと思われるが、教師に対してそのような訓練が行われていなければ、事実上不可能(1人)
 - (3) 基本的には標準語に基くのが望ましいと思う(1人)
- となっていて、どれも現実と理想の差に悩んでおられる気持が読みとれる。

「c・その他」は15.1%であるが、全員コメントがある。

- (1) aは原則、あるいは努力目標(5人)
- (2) 学習者の学習目的、日本語学習終了後の居住地によって異なる(2人)
- (3) 初級は全面的に標準語に近く、中上級で、会話、余談でわかりやすい方言を使用してもよいと思う(1人)
- (4) aは初級・中級。bは上級になればそれでいいと考える(1人)
- (5) その先生ごとに少しずつ異なっても多勢の先生に習えればその方がいいと思う。違いに気付かせることが大切(1人)
- (6) 日本語以外の数学とか英語とかの授業を関西の先生がどのことばで教えているかわからないが、日本語の授業だからと言って、特別な言葉で教えることはないと思う。教師の方もなれない言葉を使うのは大変だろうし、関西弁が話せる教師だったら関西アクセントで良いだろう。語彙も一般化しているもの(関西の学生の日常語)は使ってもよいだろう(1人。それとよく似た意見1人)
- (7) 地域語と標準語の両方を教えるべきだ(1人)

となっていて、何らかの意味でbを肯定したり、地方語の、あるいは地方語での教育を肯定したりする意見である。

以上をごく大きくまとめれば、関西の日本語の先生のうち、日本語教育は標準語という意見の人が半分、いろいろな程度や条件の差はあるが、全部標準語で標準語の教育をすることは実際にはできないとか、そうする必要はないとか、地域語も教えるべきだとかいった意見の人が半分ということになるうか。

2

次に関西在住の日本語学習者のアンケートを見てみよう。今回、アンケートに応じてくださった日本語学習者を、まず関西に来てからの期間でI~VIのグループに分け、次に母国別、男女別にわけて、その人数を表にすれば第4表ようになる。

この表から見ると、アジアの諸国からの人が396人で、全体の93.6%と、圧倒的に多い。次にこれらの学習者の、今の住居の様態は第5表のようである。

この表の「f・その他」に属するのは、父母と共に家族で暮らしていたり、親戚の家に下

第5表

今の住居 関西に来てからの期間	a 外国人寮	b 日本人外国人共用寮	c アパート	d 日本人の家に間借り	e 日本人の家に下宿(食事付)	f その他	無回答	計
I 0～0.5年	12	9	47	13	20	2	10	113人
II 0.5～1年	33	8	46	10	11	8	10	126人
III 1～1.5年	11	23	32	8	5	8	2	89人
IV 1.5～2年	2	1	20	6	2	5	1	37人
V 2～4年	8	5	16	11	3	5	0	48人
VI 4年以上	3	3	4	0	0	0	0	10人
計～人 (%)	69 (16.3)	49 (11.6)	165 (39.0)	48 (11.3)	41 (9.7)	28 (6.6)	23 (5.4)	423人

宿していたりの人たちである。「a・外国人寮、c・アパート、f・その他」に入る人たちは生活の面で比較的日本人と接触の少ない人たちと考えられるが、合計で61.9%になり、「b・日本人外国人共用寮、d・日本人の家に間借り、e・日本人の家に下宿」という、比較的日本人と接触の多いと思われる人は、合計で32.6%になる。

次に、これらの人たちに、友人がどれくらいいるかを聞いた問。

いつも、よくいっしょにいたり、話したりする日本人のともだちはいますか。

a・いない。 b・一人いる。 c・二、三人いる。 d・四、五人いる。 e・たくさんいる。

に対する回答は次の表に見ることができる。

第6表

関西に来てからの期間	a	b	c	d	e	無回答	計
I 0～0.5年	52	12	22	8	14	5	113
II 0.5～1年	50	21	21	10	19	5	126
III 1～1.5年	28	7	21	12	17	4	89
IV 1.5～2年	16	1	7	6	7	0	37
V 2～4年	12	3	15	12	6	0	48
VI 4年以上	6	2	0	1	1	0	10
計～人 (%)	164 (38.8)	46 (10.9)	86 (20.3)	49 (11.6)	64 (15.1)	14 (3.0)	423

(24) 日本語教育における位相の問題

表で見ると、「a・いない」と答えた人が38.8%で、四割近くもいることには問題を感じる。

さて、これらの学習者は、教室で習っている日本語と、身のまわりの日本人のことば(今の場合は関西方言)とを比べて、どのように感じているだろうか。表にして示すと次のようになる。

第7表

あなたがなってきた日本語をまわりの日本人のことばとくらべると、

- a. だいたい同じだ。 b. すこしちがう。 c. かなりちがう。
- d. たいへんちがう。

関西に来てからの期間	a	b	c	d	無解答	計
I 0～0.5年	23	52	25	4	9	113
II 0.5～1年	15	57	30	11	13	126
III 1～1.5年	8	49	18	11	3	89
IV 1.5～2年	5	15	11	6	0	37
V 2～4年	9	29	9	1	0	48
VI 4年以上	2	4	3	1	0	10
計～人 (%)	62 (14.7)	206 (49.0)	96 (23.0)	34 (8.0)	25 (6.0)	423

この表から見ると、「b・すこしちがう」と感じている人が全件の半分近くで、「c・かなりちがう」と「d・たいへんちがう」は合わせると全体の1/3近くになる。

次に、

あなたは自分の住んでいる地方(関西地方)の人たちの生活語(地域語・方言・dialect)を習いたいと思いますか。

という質問に対する答えは次ページ第8表のようである。

この表から見れば、習いたくないと思っている人は、全体のわずか7.6%で、大部分の人が身のまわりのことばを、習いたい、分かりたいと思っていることが分かる。

次に、「はじめのうち誤解していたことば」についての質問をしたのであるが、これは後にまわして、関西方言での表現を52項目並べて、「a・よく聞く」「b・ときどき聞く」「c・聞いたことがない」に印をつけ、その意味を英語か中国語か韓国語か日本語の標準語での言い方になおしてもらったものを、集計して(ただし、不適切と思われた二項目は集計からはずして)、正解率順に並べ、それに「よく聞く」の順位を付したものが第9表である。

なお、まったくの白紙、あるいはそれに近いものと、ほとんど全部「c・聞いたことがない」に印をつけながら、日本人の友だちに聞いて書いたのか、意味はほとんど全部正解

第8表

a. まわりの日本の人たちと話ができるぐらいに習いたい。b. きけばだいたい分かる程度に習いたい。c. よく使われることばだけ、聞けば分かる程度に習いたい。d. 習いたいが、その時間がない。e. 習いたくない。

関西に来てからの期間	a	b	c	d	e	無解答	計
I 0～0.5年	35	16	32	3	11	16	113
II 0.5～1年	48	20	28	10	13	7	126
III 1～1.5年	41	25	18	4	1	0	89
IV 1.5～2年	16	5	10	2	4	0	37
V 2～4年	19	12	11	4	2	0	48
VI 4年以上	6	2	0	1	1	0	10
計～人 (%)	165 (39.0)	80 (18.9)	99 (23.4)	24 (5.7)	32 (7.6)	23 (5.4)	423

というような回答は集計からはずしたので、集計した回答数は404になっている。

このような言葉の調査をする場合には、音声化して、耳から聞いてもらって答えてもらうのが正しい方法であり、また、それぞれにふさわしい場面や文脈の中において示すのが正しいやり方であるだろうが、今回はそうすることができなかったので、この表からは、大きな傾向を読みとることぐらいに止めざるをえない。

さて、この表から、「よく聞く」ものは、正解率も高いと言える。「すきやねん」が、「よく聞く」の順位は9位なのに、正解率が27位であるのは、集計の際に、文末詞「ねん」の部分なんらかの形で表されているかどうかまで問題にしたからで、単に「好きだ」という答えも正解としていたら、順位はもっと上ったにちがいない。また、分かっている、それが正しく表現できていないために、正解とされていないものもあり、ゆっくり時間をかけて面接調査をしたならば、もっと正解率は上がると思われる。

誤答、無回答の数は、今回は示していないのであるが、正解率の高いものは誤答も少く、「おおきに」の誤答は「いそぐな」の意にとったもの一例と、「よろしく」と書いたもの一例であるが、後者は、まったく合っていないとも言えず、「わからへん」は「～ない」と書いた1例だけで、これはひよっとすると「わから」の部分は書くまでもないと思ったのかも知れない。

このように、上位にあるものは誤答も少いのであるが、これらの回答者たちは最初からそれらの言葉を知っていたわけではなく、「地方のことば(方言)の中で、はじめのうちちがう意味にとってたことばがあったら、そのことばと、あなたがまちがって思っていた意味を書いてください」という質問に対する回答の中に、そのことが現れている。

(26) 日本語教育における位相の問題

第9表

順位	正解数 (率%)	語句	「よく聞く」 の順位	順位	正解数 (率%)	語句	「よく聞く」 の順位
1.	306(75.7)	おおきに	1	26.	83(20.5)	いかなあかん	29
2.	306(75.7)	わからへん	6	27.	82(20.3)	すきやねん	9
3.	295(73.0)	あかん	4	28.	80(19.8)	はよ、はよう	32
4.	272(67.3)	しらん	5	29.	68(16.8)	(マエカラ)しっとった	30
5.	266(65.8)	ほんま	2	30.	66(16.3)	どない	33
6.	251(62.1)	しんどい	3	31.	64(15.8)	せんといて、せんとって	6
7.	172(42.6)	なんぼ	14	32.	62(15.3)	じぶん(アシタクルカ)	32
8.	170(42.1)	いこか	10	33.	60(14.9)	なんしとってん、なにしとってん	34
9.	163(40.3)	そや、ほや、そやや	15	34.	57(14.1)	そやった、そややった、ほやった	35
10.	162(40.1)	いかへんかった、いけへんかった	17	35.	52(12.9)	もうかりまっか	38
11.	145(35.9)	わて、わい、わし	23	36.	52(12.9)	いかんならん	40
12.	144(35.6)	(コレハソレト)いっしょや	11	37.	50(12.4)	きはる、きやはる	28
13.	144(35.6)	(アシタウチニ)いてる	7	38.	49(12.1)	さよだ、さいだ	44
14.	136(33.7)	まいど	8	39.	47(11.6)	おかしなやっちゃ	39
15.	133(32.9)	ほうやろ、ほやろ、そやろ	19	40.	45(11.1)	きてはる	26
16.	127(31.4)	ちゃう	13	41.	41(10.1)	あんさん	42
17.	125(30.9)	(モウ)くるやろ、くるやろう	16	42.	37(9.2)	なんぎやなあ	46
18.	114(28.2)	わからんで	12	43.	37(9.2)	きよるやろ	47
19.	111(27.5)	こうへん、きいへん、けえへん きやへん	31	44.	36(8.9)	(トヲ)あけといてんか	41
20.	107(26.5)	こうできた	25	45.	32(7.9)	けったいな	45
21.	103(25.5)	ほな、ほんなら	21	46.	31(7.7)	よういわんわ	37
22.	100(24.8)	せえへん、しいへん、しやへん	24	47.	21(5.2)	えろう	43
23.	98(24.3)	ぼちぼち	20	48.	15(3.7)	せっしょな、せっしょうな	49
24.	95(23.5)	なんすんねん、なにするねん	27	49.	11(2.7)	わやや	48
25.	92(22.8)	ほっとけ	18	50.	9(2.2)	しよりまんねん	50

まず、「おおきに」に関して次のような例がある。

「おおきに→もの大きいの意。私は太っているので、銭湯を出る時に、『おおきに』と言われて、気嫌を悪くした。中国ではお客の方が『ありがとう』と言うから『おおきに』がお礼のことばだとは思えなかった」

この例を書いた人は私の知人であるが、いつもいつも「おおきに」と言われるので、ついにたまりかねて「私は背は高いですが、そんなに太ってはいません。どうして、いつも『おおきいね、おおきいね』と言われるのですか」と言ったそうで、そこで説明を受けて、はじめて自分が誤解していたことがわかったのだそうである。

「おおきに→『おさきに』と思っていた」

「おおきに→『はやくおきてください』と思っていた」

最も正解率の高い「おおきに」にして、はじめのうちは、このように誤解されてもいたのである。

そのほかにも少し拾えば、

「今日の飯はこわい→一瞬きよとん。毒でも入っているのかと思った」

- 「市場で商人に『こうてい、こうてい』と言われて→勿論、肯定する」
 「あかん→『あきかん』と思った」
 「なんぼ→『何本』とまちがえた」
 「もうかりまっか→『もうかりるばかり』と思った」
 「～はる→何かをはりつけるのかと思った」
 「すきやねん→『好きではない』と思った」
 「すきやねん→人の名前と思った」
 「ほとけさん→近所の人と思った」
 「いいやんか→『いいですか』と間違えた」
 「いぬ→帰るという意味を『犬』と間違えていた」
 「いかなあかん→いってはいけない」
 「わからんで→わかっているから言うな」
 「こうてきた→このようにできた」

のように、いろいろと出てくるが、だいたい、自分の知っていることばの中の、語形の似ているものに結びつけてしまうことによって起こる誤解が多いようである。方言ではないが、「ワンパタンを中国語の悪口（王八蛋）と思っていた」と書いている人もいる。また、近畿の例ではないが、『「あっ、そうですか」の意の徳島方言「あっほうか」を、はじめは「阿呆か」と思っていた」と書いている人もいる。

先の50項目の回答の中の誤答にも、「すきやねん→ラーメン、まいど→もしもし、さよだ→さようなら」など、いろいろ出てきているのであるが、細かな検討は後の機会にゆずりたい。

3

以上に見てきたような、アンケートの結果から一応の結論を引き出すとすれば、関西に在住する外国人日本語学習者は、その大部分が身のまわりの言葉であり、まわりの日本人の生活語である関西方言を、習いたいと思っている（第8表）こと、教えておられる先生方も、約67%の人が、なんらかの形で教えたほうがよいと思っておられる（第2表）こと、学習者が地域のことばを知らないために誤解やトラブルが起こっているし、これからも、ほおっておけば起こるにちがいないことなどを考え合わせると、地域のことばは、トラブルを避けるために、生活に困らないように、地域の人ちと話し合えるように、すくなくとも聞いて分かる程度には適当な時期に、適切な形で教えるべきだと思われ、そのためには、それぞれの地域で、教えるべき内容を準備する必要があると思う。前掲論文で、伴 紀子氏が「日本語学習者は話しことばの中では普通体のみならず、生活語彙や方言が理解出来なければ日本語での疎通に問題を起しやすしい」から「教える側が生活語彙や方言も自然に習得していくものとせず、教育上の対象として扱っていくべきだ」と提言しておられるのに賛成するものである。

おわりに

今回、日本語教育と地域のことば(方言)とのかかわりを考えるために、アンケート調査を行ったのであるが、準備に十分な時間をかけることができなかつたために、いろいろと反省すべき点の多いアンケートになった。にもかかわらず、快く協力して下さった先生方、日本語学習者の皆さんに心から感謝し、アンケートの集計などに協力して下さった大阪大学文学部日本学科の留学生、大学院生、研究生にも感謝し、集計がすんだ後からいただいた回答も、いずれ役立らせていただくことを申しあげて、この稿をとじることにしたい。

注、アンケートに協力して下さった機関

大阪大学

大阪府立大学

立命館大学

同志社大学 (AKP 留学生センター)

関西大学

京都外国語大学 (留学生別科)

天理大学別科

海外技術者研修協会関西研修センター

関西国際学会友会日本語学校

日本文化言語学院大阪校

東洋学院

大阪YMCA国際専門学校

神戸YMCA学院日本語科

参考文献

日本語教育学会編『日本語教育事典』(1982年5月 大修館書店)
アルク『月刊日本語 1988-8』(特集—関西弁の逆襲)

——大阪大学教授——